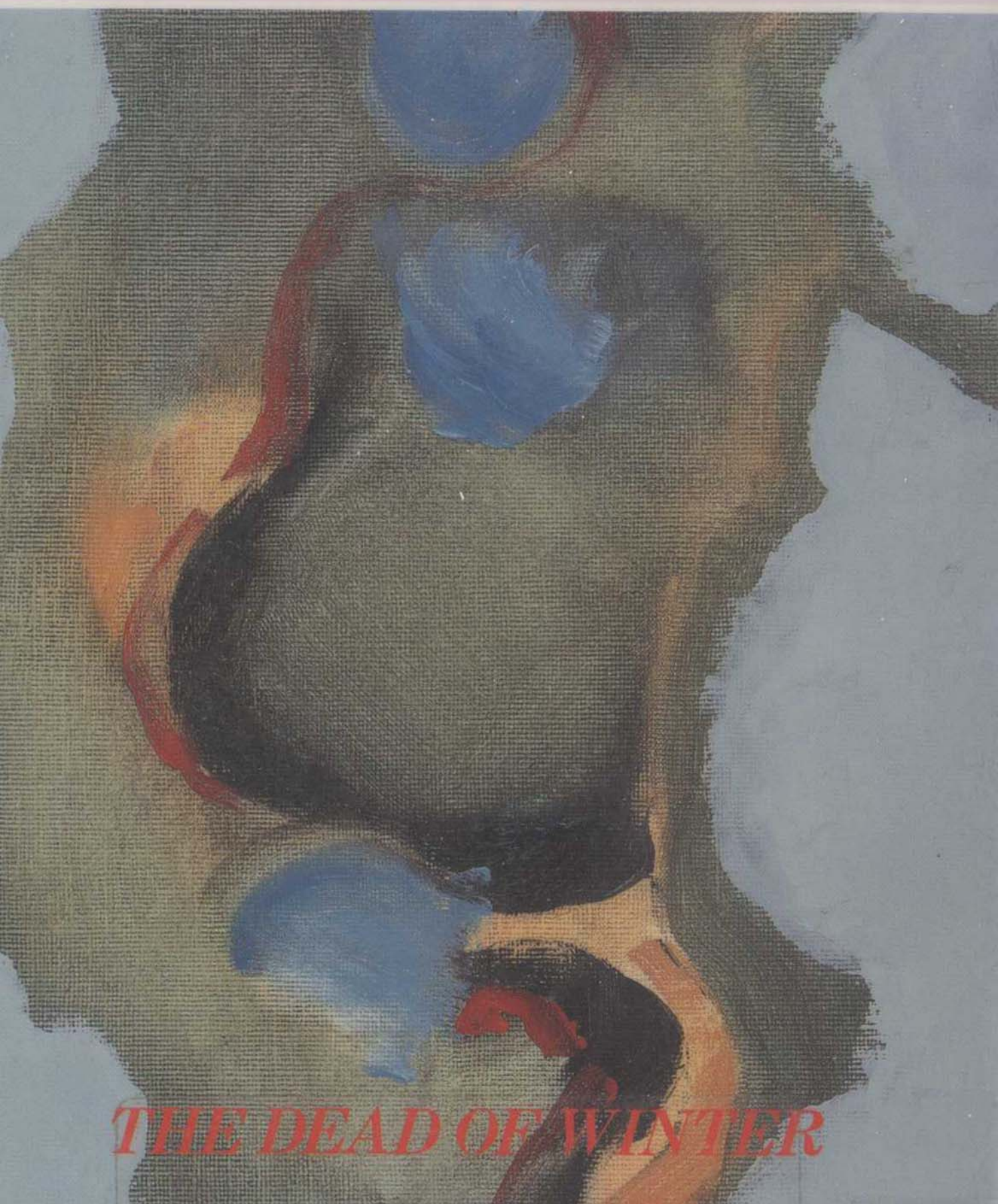


凍った枢

ポーラ・ゴズリング 山本俊子訳

1644

TOKYO
HAYAKAWA
BOOKS



THE DEAD OF WINTER

山 本 俊 子
やま もと とし こ

この本の型は、縦18.4センチ、横10.6センチのポケット・ブック判です。

東京都立第十高等女子学校卒

英米文学翻訳家

訳書

『ハロウィーンの死体』ポーラ・ゴズリング

『幽霊屋敷の殺人』キャロリン・G・ハート

(以上早川書房刊)他多数

検 印
廃 止

こお ひつぎ
〔凍った柩〕

1997年1月20日印刷

1997年1月31日発行

著 者 ポーラ・ゴズリング

訳 者 山 本 俊 子

発 行 者 早 川 浩

印 刷 所 岩城印刷株式会社

表紙印刷 大平舎美術印刷

製 本 所 株式会社川島製本所

発 行 所 株式会社 早 川 書 房

東京都千代田区神田多町2ノ2

電話 03-3252-3111 (大代表)

振替 00160-3-47799

〔乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい〕
〔送料小社負担にてお取り扱いいたします〕

ISBN4-15-001644-5 C0297

Printed and bound in Japan

凍った柩

ポーラ・ゴズリング 山本俊子訳

1644



院图书馆
章

THE DEAD OF WINTER

A A
POCKET MYSTERY BOOK

ヤカワ・ミステリ

001644-5 C0297 P1300E

氷の下の死体は気味の悪い笑みを浮かべていた。鼻は魚に食われてほとんど骨だけしかなく、部分的に残っている唇からは汚れた歯がのぞいている。容赦ない腐敗が進み、やがて死体はゆっくりと水面に浮かび上がっていった……。

厚い氷に覆われたブラックウォーター湾から身元不明の男の死体が引き上げられた。検死の結果、ニューヨークからやってきた名うての殺し屋であることが判明。五大湖に臨む静かなリゾート地は騒然となった。ニューヨーク市警、FBIと協力して捜査を始めたマット・ゲイブリエル保安官は、殺し屋の目的が裁判でマフィアのボスに不利な証言をした会計士の口封じだったことを知るが、会計士の足どりはいっこうにつかめない。折しも猛吹雪が町を襲い、さらに女子高生が行方不明になる事件が……。サスペンスの女王が雪と氷に閉ざされた厳寒の町を舞台に贈る、ブラックウォーター・ベイ・ミステリ第三弾。



ポーラ・ゴズリング

© Edward St Maur arranged
through Elaine Greene Ltd.
© Hayakawa Publishing, Inc.

〈著者紹介〉1939年デトロイト生まれ。ウェイン州立大学卒。デビュー作『逃げるアヒル』(1978)でCWA最優秀処女長篇賞、『モンキー・パズル』(1985)でCWAゴールド・ダガー賞を受賞している。

定価 1300円 (本体1262円)

Hayakawa Publishing, Inc.

PAULA GOSLING

凍 っ た 柩

THE DEAD OF WINTER

ポーラ・ゴズリング

山本俊子訳

A HAYAKAWA
POCKET MYSTERY BOOK

日本語版翻訳権独占
早 川 書 房

© 1997 Hayakawa Publishing, Inc.

THE DEAD OF WINTER

by

PAULA GOSLING

Copyright © 1995 by

PAULA GOSLING

Translated by

TOSHIKO YAMAMOTO

First published 1997 in Japan by
HAYAKAWA PUBLISHING, INC.

This book is published in Japan by

arrangement with

GREENE & HEATON LTD.

through TUTTLE-MORI AGENCY, INC., TOKYO.

すばらしいエージェント、

すばらしい友人、

そしてとても懐かしい

エレーン・グリーンに。

凍
つ
た
柩

登場人物

ジェス・ギボンズ	}	高校教師
トム・ブラディ		
パット・モリスン		
リンダ・ケイスマア		
チップ・チャンドラー		
ジェイスン・フィリップス		
クロード・トリケット		
フレッド・ノートン		
エド・マーティン		高校教師。フィリップスの前任者
エミリー・ギボンズ		ジェスの妹。新聞記者
クリッシー・フォークナー		女子高生
ジョーイ・リットー		クリッシーの友人
アルバート・ヴァーノン		殺し屋
ピーター・マーフィー		裁判の証人
ルカ・リットー		ニューヨークのマフィアのボス
サム・ペスカトーリ		リットーと対立するマフィア
ヴィクター・モス		地元のマフィアのボス
ジェフ・ケリー		獣医
ヘンダースン		ハッチヴィル警察の署長
レスリー・ブロコー		FBI 捜査官
ティリー・モス		保安官事務所の事務局長
ジョージ・パトナム		副保安官
マット・ゲイブリエル		保安官

一 月

ブラックウォーター湾の湖面は一面に曇った空の光を反射して、汚い灰色がかった白になっていた。湖には厚さ二フィートを越す氷が張り、冷たい風の吹きさらす氷の平原がパーキンズ岬から水平線まで続いている。水平線に近いあたりでは湖はここよりも深く、凍っていない水が氷の縁をひたひたと洗っている。

冬の間だけのこの平原の上にはたくさん小さな建物が散らばっている。それぞれの建物の中には、ちょうど繭のように、冬の寒さに備えて自分のサイズの二倍ほどにふくれあがった人間が一人ずつ入っており、その全員が一人の例外もなく、ロダンの「考える人」か、下剤の広告の中心

人物そっくりの格好で座っている。彼らの注意を集めているのは氷に開けた一個の穴である。

彼らはそれぞれ、もはやまともな使用に耐えなくなったスツールや、ビールを運ぶ古い木杵、すりきれた膝布団、こわれた椅子などに座っている。その姿は沈思黙想的で、静かで、ちよっぴりアルコールが入っていることもまれではない。

フランク・ニクシーはその日は朝の七時から氷の上に出てきていた。両足は感覚がなくなり、手も顔も、そして頭もしびれていた。びくの中には小さなスズキの類の淡水魚が四匹入っている。彼は妻の母親が町に帰るまでは絶対に家に戻らないと心を決めていた。

突然彼は体をこわばらせた、そして熱くなったかと思うと急にまた寒くなり、もっと寒くなった。

足元の穴に、恐ろしげな顔が現われたのだ。現実とは思えないようなその顔、そんな場所にあるはずのない顔、それでもそこにある顔。

皮膚の引き裂かれていない部分は白い。鼻はほとんど骨

だけになっている。部分的に残っているくちびるは気味の悪い笑みを浮かべてらんぐい齒をのぞかせている。額のまんな中には小さな黒い穴。

上を向いた顔は、思いにふけっている人のようにフランクの顔をつきぬけて向こうをじっと見ている。

もしそいつが何かしゃべったとしたら、彼は家まで戻って下着を取り替えなければなくなるだろう。しかし幸いにしてそいつはしゃべらなかった。穴の奥で静かに動いている水にふわふわと漂っているだけだった。

長い間フランクはそれをじっと見下ろしていた。次第にその顔は下に沈み、暗緑色の水の下にかくれてしまったかと思うと、また浮かび上がってきた。

寒さばかりでなく、この思いがけない訪問者を見たショックですっかり縮みあがってしまったフランク・ニクシーは、穴に向かって大声で叫んだ。彼の息で水にはさざ波が立った。

「おい、いったいそんなとこで何してんだ？」

しかし、答えはなかった。

パーキンズ岬のその家は、海岸から三十フィートばかりの高さに切り立っている岩の多い灰色の崖の上にあつた。

崖の縁から草がちょうど不機嫌な人間の眉毛のように垂れ下がっている。崖の上には大きな木々が生え、黒いレースのように家の周囲を枝でとりかこんでいるために、家はヴィクトリア朝時代の象徴のようなきびしい表情でブラックウォーター湾を見下ろしているように見える。かつては白く塗られていた下見板はペンキを塗らねばならない状況で、ひどく冷えこんだ今朝は、本来ごてごてと飾られていた形跡だけが残っているこの家の屋根から、長さの不揃いな氷柱が、雪の積もっている荒れ果てた敷地に向かつて^{あいくち}ヒ首の

ように伸びている。

そういう外観に反して、パーキンズ岬の家に住んでいるのは、孤独でけちんぼの隠遁老人ではなく、それぞれが自分の生活を持って共同生活を営んでいる六人の比較的若い人たちだった。そういうわけで、この古ぼけた家の維持管理上の問題は、住人が金を出すのを渋っているということではなく、すべきことをすぐにやらないで先のばしにしているということであつた。

パーキンズ岬の家の一番高い窓に立って、ジェス・ギボンは、長い髪をとかしていたブラシを一瞬止めて下を見つめた。

下に広がっている氷上の釣り人の村の雰囲気は、たいていは至極のんびりとしていて、瞑想的で、内省的な休息を思わせるものであつた。厚着と低温のために血のめぐりが悪くなり、手足がしびれているため、氷上の釣り人たちはゆつくりと足をひきずって歩くのがせいっぱいで、めつたにすばやく動くことはない。

それなのに、今、氷の上で、一人の男が、あまり立派で

ない小屋の一つから姿を現わし、岸に向かって走っている。ジェスはその男が他の小屋の間を縫って、いきあたりばったりのルートをとって走っていくのを見ていた。ほとんどパニック状態で足をかくかくさせているその走り方に思わずジェスは笑ってしまった。こんな時刻だが、たぶん酔っ払っているのだろう。時折彼らは前日の酔いが醒めきらない状態でやってきて、その日一日、ほどよく体がほてった状態で過ごすのだ。

一日じゅう背中を寒さにさらして座っているという状況には、アルコールで麻痺した状態が都合がいいのだろうとジェスは思った。ジェス自身、だれにも負けず酒は好きだったが、死んだ魚と顔をつきあわせたら、酔いなんかたちまち醒めてしまうだろう。だから、ジェスに関するかぎり、それはおいしい酒の浪費としか思えない。あつという間に二十九歳になってしまった彼女ではあるが、そんなことよりもう少ししあなたのはしみがほかにある。もつとも、そういうことは、次から次へとやってくるというものではない。目のまわりのしわだけはどんどんふえるけれども。

いつものようにフレンチ・ツイストにしてヘアピンでしつかりとめながら、ジェスは目の下の氷上の村の状況と色から、左手のコルクを貼った壁にピンで止めつけた未完成のパッチワークのキルトへと目を移した。この入江に年々きのこのように出現する村には、青とオレンジを主調とするどこか中世的な雰囲気があった。しかしそこには黄とグリーン、深紅、土色などのタッチもあつて、ジェスはそれを自分のキルトに取り入れようと思っていた。まだまだ未完成の自分の作品を眺め、あとわずかし時間が残っていないことを思うと、彼女は口惜しそうに深く息を吸い込んだ。そのキルトは今年の夏開かれる国際キルト展に出品するつもりなのだ。青白い氷の上に散らばるカラフルな小屋を印象派的に表現しようというのである。しかしこの調子では、期日までに出来上がりそうにない。

ジェスは寢室のタンスの上の鏡に向かって顔をしかめた。クリスマス休暇にインフルエンザで寝込んだ。しかし、それだけがジェスの目の暗さと目の下のくまの原因ではない。大きな暖かいベッドに横になり、白いペンキを塗った

屋根裏部屋の天井のたる木を見上げながら、ジェスは自分の生活をとつくりと観察し、そこに何か欠けていることを思い知らされたのだった。

あんたの顔を見てごらん、と彼女は鏡の中の自分に向かって言った。ジェシカ・マーガレット・ギボンズ、いつもの鋭さはどこへいったの？ 今日、着ようと思ったものを見てごらん。顔の表情を見てごらん。生き生きしたものは何もないではないか。どこかに望みがあるか。どこにもありはしない。あるのはとがったあごと、長い黒い髪、大きな目、不機嫌な口、そしてよろこびのない、あきらめの表情だけ。鼻に個性があつたって、人間としては何の個性もないのだ。

おまえはあの氷の上の男たちに対してずいぶん優越感を感じてるらしいが、どうしてそんなことができるのか。そう、この土地の高校であと二、三十年も教師を続けたら、おそらく氷上の釣りが最高のたのしみに見えてくるだろう。年を取ったら、まずブリッジを覚え、次にローンボウリングに夢中になり、そのあとはタツチング（レース風の編み糸細工）、次

は揺り椅子からおっこち、次は入歯を入れ忘れて子どもをおびやかす、そのあとは死ぬだけ。一生なんて短くてたいくつなものだ。

ジェスは屋根裏部屋の魔女と向かい合うのをやめて窓に戻った。外を見ている方がよっぽどおもしろい。

走っていた男は入江の下手を縁取っている岸壁の、船を繋ぐための梯子にたどりついて、えっちらおっちら登りはじめた。大きなブーツが横木の間にはさまって登りにくそうだ。さつきよりは近くなので、彼が酔っ払っているというよりあわてふためいていることが見てとれた。たしかあれはフランク・ニクシーだ。とすると、彼をあれだけ興奮させたものとしては、パンツの中に入った蟻から鐘楼に飛び込んだこうもりに至るあらゆることが考えられるが、それを決定するのは彼の義理の母がどれだけ長く彼の家に滞在しているかということだ。

彼が釣り人たちが車やトラックを停めている駐車場に向かわずあんな方に向かつて走っているということは奇妙であつた。ジェスはしばらく眺めていたが、やがて肩をすく

め、大きな部屋の中に戻っていった。

しばらく郷里を離れていたジェスがこの地域の高校の家庭科の教師としてブラックウォーターに戻ってきたのは二年ほど前である。

ブラックウォーターで育ったにもかかわらず——あるいはその故に——というべきか——戻ってきたばかりのときは奇妙な感じを味わった。なつかしいという感じに、何もかもが覚えているよりも小さく、ちよっぴりみすばらしいという感じが伴っていた。それから、幽霊。休み時間になつかしい廊下にあふれている若者の群れの中に、昔の友人や、自分自身の面影さえも見えるような錯覚を起こすのだ。

目を輝かせ、希望に満ち、フレッシュで、世界を制覇する日を待ちかねていたあの頃の自分。それから、町に出て昔の友人に会うと、彼らの中に起きている変化——いくらか背を曲げた姿勢、責任を背負いこもうとする態度、といった、年月の経過が人間に及ぼす最初のかすかな侵害——を見るのだ。

最初、このことはジェスをゆううつにした。しかし何カ

月かたつと、幽霊は廊下から消えた。昔と今の差を感じることはあまりなくなった。そして、町で会ってあいさつを交わす友人たちは完全に普通の人間となり、自分の姿もシヨックや悲しみを与えなくなった。

しかしそれは今朝までのことだった。新学期の始まりに当たって、ジェスははつきりと自分自身を見てしまった。そして幻滅した。

ジェスは、中年をまるで長い間待っていた愛人ででもあるかのように抱き締めようとしている自分を見た。ベージュのセーター、ベージュのスカート、まともな靴、まともな態度、まともな生活。

いやだ！

まったくもう。ともかく、今日はベージュだけはやめておこう。新学期ではないか。新しい出発なのだ。わかったわね？ わかった。十年前だったらどんな服を着たかしら。やってみなさい、とジェスは自分に言い聞かせた。もう一度、チャンスをねらうのよ。そう。生徒を死ぬほどこわがらせてごらん。あんたをこわがらせてごらん。やってみる

のよ。

クローゼットの奥をさつと点検したあと、ジェスはどれを着るかを決めた。新しい赤いカシミヤのセーター（どうやらいまだに娘の野性的で芸術的な野望を信じているらしい両親からのクリスマス・プレゼントだ）の裾を長い黒のジャージーのスカート（いつまでたっても死からよみがえらない姉をあきらめたらしい妹からのプレゼント）の中に突っ込み、幅の広いレザーのベルトの大きな銀のバックルで、まだスリムさを保っているウェストを締め、はき古したカウボーイ・ブーツ（何年も前にバーゲンで買ったもの）をはき、雑色で過激にアブストラクトな刺繍を施したキャンバス地のチョッキ（大学の行事のために自分で作ったもの）を羽織った。新しくそして古いジェスが、銀のチェーンを二つ首に巻き、重いメキシコの銀のイヤリングをつけながら階段をとんとんと下りてキッチンにかけこむと、ちょうどトム・ブラディがシリアルに牛乳の残りを全部ぶちまけたところだった。ジェスの一瞬の元氣は消えた。

「あら、みんな入れちゃったの、トム」とジェスは言った。

トムは平然としてジェスを見た。「きみはいつもコーヒ―はブラックで飲むじゃないか。それに朝食は食わないんだろう？」

「そういうことを言ってるんじゃないのよ……」

「それ以外に何があるんだい」

「彼女、今朝は何か実質的なものを食べたかったんじゃないんですか」トムの向かい側に座ってベーコンエッグを食べ終わろうとしていたジェイスン・フィリップスが言った。「何かすぐにできるものを作ってあげようか、ジェス」

ジェスはやかんの下の火を強くしながら身震いした。

「いいわ、ありがとう、ジェイスン。今朝はちよつと緊張してるものだから」

「ほかの連中はみんな行っちゃったからね」とトムが言いわけするように言った。「今日はぼくが買物の番だから、牛乳も買ってくるよ。必要なもの、みんなメモしてくれてある？」

「ええ、じゃ、お願いします。チップとパットとリンダ、もうでかけちゃった？」